

D-7 幼児期の体力測定について—家庭環境と体力との関係—
広島大学 ○瀬之口スミ 大分合同新聞 深田千代子

目的 近年生活水準の上昇するなかで、子どもの体位はめざましく向上してきたが、反面体力の劣弱化が指摘されている。今回子どもは幼児教育の一資料を得る爲に、幼児の体力測定を試み、家庭環境のなかで体力を育つ要因となるものを求めた。

方法 昭和45年8月、F市A保育所男女児計59名(4才児)を対象に、体位測定と体力測定(ソフトボール投げ、垂直跳、腕力、立ち幅跳、30m走の5種目)を行った。さらに10月にAとB保育所の男女児計155名(4才児)に上記の測定と母親を対象に家庭環境調査を実施し、各項目ごとに体力との相関を検査した。

結果 身体発育状況は男女とも飯塚の標準値(昭和43年)を上回って発育し、ロレレ指数は男1.49、女1.48で肥満傾向はみられなかった。体力測定値についてA保育所59名の場合、10月の測定値は8月のそれより明かに伸びがみられた。又保育所間には腕力と30m走に、Aがやや良好であったが大差はなく、性別による差は各種目とも男児が優れ、とくにソフトボール投げにその差が目立っていた。飯塚の体力標準値と比較すると、体位のつびと同様に各種目とも標準値を上まわった結果を得た。ついで身長、体重、胸囲と5種目の測定値との相関を性別に検討した結果、30m走、ソフトボール投、垂直跳、腕力、腕力との関係する項目において、男児の方が女児よりも体格との相関が高かった。運動能力を上位群と下位群にわけ、栄養、母の育児態度、遊び等について体力との間に関連があるが否が検査したところ、友達との接触頻度が多い程運動能力が優れていると云える他は、有意性が認められなかった。